今木

〔北山抄二月六〕同日〇十一日神今食事

主殿寮儲御浴於寢側、縫司獻天羽衣、

〔建武年中行事〕六月十一日御神事、一日よりはじまる、行幸あり、〇略中とのもんれう御ゆまいらす、〇略中うへのきぬぬぎてうへに明衣をきたり、下がさねおなじく著せず、〇略中さて御舟は御ゆかたびらめしていらせ給、三杓めして天の羽衣、御ゆかたびらといふなり舟のうちにぬぎすてゝ、更に又くられうの御ゆかたびらをめしてあがらせ給、

〔伊呂波字類抄雜物〕今木イマキ御湯殿時著衣名也

〔後奈良院御撰何曾〕雪のうちに參りたり　ゆまき

〔嬉遊笑覽二上服飾〕ゆぐといふは、〇略中或はいまきなどいふは非がことなり、いまきは湯卷にて、湯殿に用る具にはあれど、異もの也、

〔西宮記臨時四〕天皇禮服

平生奉仕帝王御鬢者、著今木衣、

〔侍中群要五〕定詞

今支奉仕御湯殿之人所著衣也、生白絹也、

〔禁秘御抄上〕一恒例毎日次第

凡禁中著湯卷、上臈一人、典侍一人也、是候御湯殿故也、近代上臈中准此役多著之、不可爲例、但少々聽之、

〔日中行事〕辰の時にとのもりのつかさ御ゆをくうず、すましといふ女官これをとゝのふ、内侍御湯のあつさぬるさをさぐりて、ことのよしを申す、御湯殿つかうまつる内侍いまきをきる事もあり、